

自作のタオルの動物たちを前に目を細める服部さん—西区富士見が丘



一枚のタオルから、自由自在に動物の縫いぐるみを作り続けてきた主婦がいる。西区富士見が丘三、服部まき子さん(六三)。独自に考案した作り方で、三年前には、特許と実用新案を取得。タオルと糸だけで作れる、という手軽さが受けて、大阪で教室を持つほか、東京まで出張講習に行くことも。これまで手掛けてきた作品は約百五十種類だが、「珍しい動物を見ると意欲がわきます」とい、これからも増え続けそうだ。

タオル使い 縫いぐるみ 動物

西区の主婦服部さん

独自の手法で自在に

特許と実用新案取得 教室で指導も

タオルの動物を生み出したきっかけは、約三十年前。

病弱で病院通いを繰り返していた二男のために、診察を待つ間、タオルでゾウやキリンを作ったのが始まりだった。

作り方は簡単。一、二枚のタオルと糸、少量の化繊綿が材料で、布を切らずに、折り込んだりたたむことで形を作る。タオル一枚が縫いぐるみに変身し、糸を解けば元に戻るという、リサイクルの視点を生かした点が主婦に受けて、テレビや雑誌で紹介されたのをきっかけに、ファンが増えるようになった。

これまで作った生き物は、動物や魚介類、鳥類、恐竜などで「どれぐらいの数を作ったかは数え切れない」。現在人気があるのは、今年のエトの犬やプーになった恐竜とか。

「まだまだ、種類を増やしていきたい」と張り切る服部さんの夢は、タオルの動物たちを集めて動物園風に飾り付けた喫茶店を開き、体の弱い人や障害者、お年寄りが集える場にするということ。「通院から生まれた縫いぐるみだから人の役に立てたら」と、これからも「仲間」が増えそうな動物たちを前に目を細めている。